



1994年1月

# ニュース

No. 36

日本工学アカデミー広報委員会

事務局：〒101 東京都千代田区岩本町3-8-16  
(東誠ビル8階)

電話：(03) 5820-6771~2  
FAX：(03) 5820-6773

## 年頭にあたって

会長 向坊 隆



明けまして創立7周年を迎え、おめでとうございます。

会員諸氏のご活躍により、本工学アカデミーの活動は日々活発化し、シンポジウム、懇親会、委員会などを通じてわが国工学の発展のために努力しております。

国際的にも近く開かれる第3回国際シンポジウムでは、技術移転と技術拡散を中心テーマとして各国の工学者と意見を交わすことになっております。

しかしながら、国を挙げて不景気と戦っている昨今、わが工学アカデミーも悩みを抱えていない訳ではありません。

第一に会員数の伸び悩みがあります。特に国際的な活動を盛んにする為には、相当の費用を要し、その為には会員を増やすことが先ず必要であります。それには先ずアカデミーの活動が広く会員諸氏に支持され、参加者が増えることが要求されます。会員増即ちアカデミー支持者を増やす為には、地方におられる会員の方々に喜んで頂けるような活動を盛んにすることを考えねばなりません。また、アカデミーには工学方面で業績をあげられた優れた方々が多数参加しておられますが、未だ若い工学者達の関心を引くような活動は十分ではないと思われます。この事は、これからのアカデミーの発展のために、良く考える必要があります。

第二に、これからのわが国の工学は、次々と新しい技術なり知識を生み出して行かねば諸外国との厳

しい競争に打ち勝っていく事ができません。その為に何をすれば良いのか、これも難しい課題ですが皆さんで絶えず考えて行くべき課題です。これについては、一つは工学教育のあり方について反省が必要であります。最近産・官・学の協力の一つの方向として技術者の再教育の問題が取り上げられ、文部省も産業界もこの動きを支持しておられます。これも大切な方向の一つですが、教育の中で創造力を育てて行くにはどうするか、工学が生物学、環境問題その他の分野に亘って次第に広がっていく学問として、その中で創造性を発揮して新しい途を開いていくことも容易ならざる課題と思われます。最近、大学院の強化も大きな課題とされていますが、それに対してアカデミーがどのような貢献をすることができるのでしょうか。

国際協力は、アカデミーが出来た時から皆さんの関心を呼んでいる問題の一つです。従来は先進国に追い付き追い越す事がその課題でした。しかし、今では事情が変わってきました。先進国に対してもある分野ではわが国の方が進んでおり、これからの一層の進歩のためには自ら途を拓いて行く必要があります。さらに、世界には無数の発展途上国があり先進国の援助や協力を必要としています。これらに対処していく途も、わが国にとって、やはり新しく立ち向かう事が要求されている課題です。

単なる援助ではなくて、途上国の自発的な努力をどうすれば上手く開発に向けられるか。これも容易なことではありません。

これらのいくつかの問題を解決すべく、日本工学アカデミーの会員の皆様の一層のご活躍を切にお祈りする次第であります。



あけましてお目出とうございます。

新しい年を迎えましたが、何処へいっても不景気の話ばかりの様にみえます。大学も例外ではありません。特に私立大学にあっては、18歳人口の急激な



減少期にあって、生き残れるかどうかの瀬戸際にあります。しかしよく考えて見ると、数年前の好景気時代の方が異常であって、現在の世の中の方が正常なのではないかと思われてなりません。

現在景気の回復に日夜血の滲むような努力をし

ておられる産業界の方々には、誠に申し訳のないお話ですが、数年前の様に、全然勉強しようとしにくい学生でもどんどん採用してくださる時代に、厳しい訓練をして、学生を正しく教育することは大変困難

でした。その上同じ大学でも文科系の学科に比べて工学部では授業の負担が厳しくて大変だから、という理由で受験生も減少傾向にあるなど、科学技術の進歩に依存せざるを得ない我国の前途はどうなるのかと心配にならざるを得ませんでした。

確かに今の様な不景気の時代に対処することは大変です。大学においても、不景気の結果、教育、研究に対する政府の補助金や、産業界の御援助は減少し、また父兄の御負担を考えると、授業料の値上げは困難であるとき、立派な技術者を教育する為に如何にしたら良いかというのは大変な難題です。まして産業界にあっては、遥かに困難な事態に直面しておられることでしょう。

しかしこのような難局を我々自身の努力で乗り越えてこそ、我国の輝かしい将来があり、また我々はそのことを為し遂げることができるものと確信致します。

日本工学アカデミーの皆様の御奮闘を期待して年頭の辞と致します。



新年お目出度うございます。今年の元旦は日本列島の大部分が晴天にめぐまれ、各地で美しい初日の出が望見されたように、先づは幸先の良いスタートを切ることができました。昨年は経済不況の深刻化、冷夏による米の大不作など、芳しくない

話題の多い年でしたが、今年はコンドラチェフ・サイクルの谷間から立ち上がって、しっかりと上昇気流に乗ることのできる年でありたいものです。当面はリストラクチャリングなど厳しい課題が山積しておりますが、我々のえい智と活力によって、必ずやこれを克服できるに違いありません。寒ブリは身がしまつて味がよいと申しますが、ぜい肉落しの苦しい過程を経て、我々の基礎体力は一段と向上するでしょう。

昨年に引き続き、国際情勢は激動を続けるでしょう。そしてその主な要因の一つとして技術革新能力が益々重要なものとなってくるでしょう。米国では高性能コンピュータ・通信（HPCC）計画を基軸とする、産

業の国際競争力の抜本的強化が着々と進められています。保険医療制度の改革や交通システムの近代化も最優先課題として取上げられており、そのための技術革新も強力に推進されています。これはヤング・リポートの提示した基本路線の具体的な実践といえるでしょうが、冷戦終結を踏まえ、軍縮による余剰資金の大幅な投入による、民生産業の振興と社会資本の充実を指向するという、大胆なグランド・デザインを垣間見ることができます。欧州にも新たな胎動が見られますし、日本の周辺の東アジア諸国は、これまで驚異的ともいわれてきた高率の経済発展、技術革新をさらに続けていくでしょう。

今日の日本にも21世紀を展望した、明確なグランド・デザインが必要です。日本工学アカデミーは昨年も、新社会資本の充実、基礎研究の強化、高等教育改革などにつき、いくつかの提言や要望を発表して、政策への反映につとめて参りました。今年も適時適切な提言を大胆に行っていくとともに、3月に予定されている国際シンポジウムをはじめ、多くの国際活動を通じて、地球的規模での理解と合意に、積極的なリーダーシップを発揮していきたいものと念願しております。





新年、明けましておめでとうございます。

世界の政治・経済は、グローバル化、ボーダレス化の傾向を強め、国際連合等を中心に、世界の国々が協力して問題解決を図るようになってきましたが、世界同時不況は依然として先行不透明な

状況が続いております。

米国のクリントン政権は、技術が経済のエンジンであるとの政策を明確に打ち出し、局面打開の決め手として、新社会資本への投資を実行に移しつつあります。

日本は、自分自身で、この不況からの脱出のシナリオを考えざるを得ません。現在、所得減税や新社会資本整備を始めとする不況対策が期待されております。しかし、長期的に考えれば、日本としては新技術により国際競争力のある産業の強化と新産業の育成が必要であります。

この実行については、産官学のそれぞれの組織から独立した個人の資格で、しかも、横の広がりを国際的に持つ日本工学アカデミーの場の活用が期待されるところであります。本年も日本工学アカデミーの国際活動の推進が大いに望まれるところであります。

本年は日本を取りまく環境の変化に対応しつつ、日本工学アカデミーの一層の飛躍の年であることを、皆様方と一緒に期待するものであります。



会員の皆様、新年おめでとうございます。産業界はバブル崩壊によって巻き起こされた、かつてない不況のなかで、新年を迎えました。しかし、不況だからと言って、研究開発の手を休めるわけにはいきません。むしろ不況の時こそ、じっくり

腰を据えて基礎研究に取り組む必要があります。

次の世代の為に、貴重な地球の資源を有効に活用し、地球環境を大切にする“持続的開発”を可能とする技術、そして開発途上国の人々にも喜んでいただける技術の開発が今、強く望まれています。これには従来の考え方に囚われない新しい革命的な発想が必要です。

昨年良く読まれた本に“木を植える人”と言う本があります。これは荒れ果てた土地にいつか緑の森が育つことを信じて、ただひたすら団栗を植えていった人の話です。他人の育てた木を利用しようなんて考える時代ではありません。自らの新しい発想で苗木を植え、木を育てなければなりません。

日本工学アカデミーはいろいろな技術や専門をもった方の集まりです。いろいろな技術の融合から新しい発想は生まれます。日本工学アカデミーは、これまで日本の科学技術の振興のために非常に価値ある提言をしてまいりました。日本の地に数多くの基礎研究の種を蒔くため、そして世界の研究者や技術者に力を合わせてやろうと呼びかけるため、今年も意義のある提言と努力を続けたいと思います。

明日を信じることが重要です。明るい未来を生み出すため、今日、皆様といっしょに基礎研究の種を蒔き、若い人々を育てていきたいと念願しております。

明けましてお目出とうございます。

もっとも今年のお正月は、目出たさも中位なりといったところが実感でしょうか。最近では、アメリカのエレクトロニクス、自動車産業がずいぶん復活しているのに日本の方は大分立ちおくられているとい

われ、中には、これはもうガダルカナルの再来ですよという人までいるようです。デパートをはじめ、いたるところ閑古鳥が鳴く寂しさと云われ、また新聞では新しい卒業生の就職難が大きく取り上げられています。しかしその反面、年末年始に海外





へ出かけた人の数は過去最高で昨年より12%も多かったという報道もあり、ストック不況ともいわれています。本当のところどうなっているのでしょうか。

私は日本という国は、将来、世界史のなかに何を残せるのだろうか、ど

ういう国として位置づけられるのだろうかと考えることがあります。そういう風に考えたとき、今年あたりはそれが良い方に行くのか、そうでないのかを占える年になるような気がします。良い方に行くためには、日本は力も品格もそなえた立派な国に

ならなければならないわけですが、その力も品格もバブルではない本物でなければなりません。不況とはいえ日本はそれを成し遂げるだけの余力を持っていると思うのですが、それが実際に成し遂げられるかどうかは偏にわれわれの心がけにかかっていると思います。そういう意味でいまの不況は、日本国民を試す大きな試金石になるでしょう。

幸いにしてわが日本工学アカデミーは、各界で日本を代表し、日本の方向づけをしておられる方々の集団であります。ぜひとも会員諸賢のご活躍により、この日本を良い方向に持って行っていただきたいものと存じます。

年頭にあたり、会員諸賢のご健勝とご活躍を切にお祈りいたします。

---

## 講演会—第57回談話サロン「ランドマークタワーの設計と建設」

---

日 時 平成5年12月2日(木)

場 所 弘済会館

講 師 牧野 巖氏

(三菱地所株式会社取締役建築業務部長)

12月2日の第57回談話サロンは、三菱地所株式会社取締役建築業務部長、牧野巖氏をお招きして「ランドマークタワーの設計と建設」と題する講演を拝聴した。ランドマークタワーは我が国で最も高い建物であるばかりでなく、平成6年3月開催予定の日本工学アカデミーの第3回国際シンポジウムの会場にもなっているため、会員の関心も高く多数の会員の出席があって盛況であった。講演に先立ち、ランドマークタワー建設施工の共同企業体の幹事会社として本計画で主要な役割を果たした大成建設株式会社取締役副社長、北村弘会員より、牧野講師が三菱地所(株)MM(みなとみらい)21設計室室長としてランドマークタワー設計の指揮を執られたことも含め、同氏の御経歴について紹介があった。

講演に先立ち、20分弱のビデオにより、ランドマークタワーの建設されたMM21地区におけるランドマークタワーと周辺の一連の建物も含めた街区の開発について、企画のコンセプト及び完成した建物等の内容の紹介があった。講演は70枚余りのスライドを用いて約1時間に及び、建築の全体計画、日本で最高70階の超高層棟(ランドマークタワー)の計画、旧三菱造船所石積み2号ドックの保全も含めた低層部分の計画などについての説明の後、特に重点を置いた防

災計画について若干詳しい解説があった。次いで、構造計画の概要とそれに関連する建設方式を述べられたが、耐震設計、耐風設計についてはモデルによる震動、風洞実験の結果も含め、日本工学アカデミーの講演会としてふさわしい内容のものであった。

食事後の質疑応答も多岐に亘り、この建物の世界で胸を張れる要素から周辺への影響を含む各種の技術的質問、更にはこの様な大型企画における女性の関与迄、非常に活発であった。

講演、ビデオ、質疑応答とも大変興味深いものが多く、この様な大規模開発を整然と企画完成されたことも含め、出席会員、ゲスト共多大な感銘を受けた。

本講演はビデオや大量のスライドを使用された関係からInformationとして刊行するのは若干困難であるが、ランドマークタワーの企画から設計迄の部分について要領よくまとめられた牧野講師他による「みなとみらい21・25街区ランドマークタワー」(ビルディングレター誌90年7月号抜刷)のコピーの寄贈を受け、余部も若干あるので御希望の会員は事務局迄お申込頂ければお送り致します。

(文責 桜井 宏)





---

## 講演会—第58回談話サロン「環境負荷の低減とPLCAの動向」

---

日 時 平成5年12月14日（火）

場 所 弘済会館

講 師 後藤 典弘氏

（国立環境研究所社会システム部長）

第58回談話サロンは昨年12月14日に開催され、国立環境研究所、社会システム部長の後藤典弘（すけひろ）氏から、「環境負荷の低減とPLCAの動向」と題する講演を伺った。この講演会は日本工学アカデミー臨時NAE環境会議協会委員



会の企画によって開催されたものである。御高承の通り日本工学アカデミーでは本年5月米国アカデミー（NAE）がカリフォルニア州アーバインのベックマン・センターで開催を予定しているIndustrial Ecologyについての国際会議に代表を送り協力する事となり、そのために前記の臨時協力委員会（委員長：植之原国際委員長）を組織し、検討を開始していたが、その会議で議論される主要テーマの一つLCA（Life Cycle Assessment）について造詣の深い方のお話を伺っておくのが望ましいという事になり、理事の市川惇信氏（国立環境研究所長）に御相談したところ、後藤氏が最適任とのことで、市川先生の御紹介で、後藤博士に講演をお願いする事になったものである。

後藤講師はLCAはPLCA（Product Life Cycle Assessment）という方が正確との理由と、その目的

が地球に対する環境負荷の低減にあるので、前述の題名を選ばれたものである。

講演はPLCAそのものより、PLCAが必要とされるようになった歴史的背景を、行政の面から解説される事に重点をおいたもので、今どうしてPLCAかという疑問に答える事が講演の大半を占めた。特にこれからの経済発展と地球上の資源、環境の持続的な維持を両立させるための産業活動の評価の手段としてPLCAの必要性和、最近の世界に於ける地球環境維持のための考え方、我国に於ける立法、行政面からの環境負荷低減のための取組みについて詳しく解説され非常に有益であり、出席会員に多大の感銘を与えると共に、各種の問題点を示唆するものであった。

PLCA手法そのものについては時間の制約もあり、十分なお話を伺えなかったが、後藤氏執筆の雑誌PPM（1993年11月号）論文「環境負荷低減のための“PLCA”の意義と重要性」と題するPLCAの手法の解説の入ったもののコピーが参考資料として配布された。

講演後の質疑応答、論議も活発で、本日の主題と直接の関係はなかったが、平尾収会員との間での人類の将来についての価値観も入った討論は、地球環境問題の根幹に係るものであるが、後藤講師の二つの異なった考え方をエコセントリック（環境中心）とアンソロポセントリック（人間中心）と考えると分かりやすい、自分はエコセントリックであるとの解答で有意義な会合の幕を閉じた。

なお当日の講演は大部分のOHP図表等も加えInformation No.40として印刷の上、当日配布の参考資料コピーも添えて、全会員に配布すべく準備中である。（文責 桜井 宏）

---

## CAETS（Council of Academies of Engineering and Technological Sciences—世界工学アカデミー連合）の御紹介 I

---

会員各位より強い御要望のありました外国の工学アカデミーの紹介につきましては、Information No. 33で米国の工学アカデミーを、またニュースのNo. 33、34、35の3回に亘りオーストラリア、スウェーデン、及びスイスの工学アカデミーを紹介してきましたが、この辺で外国アカデミーの紹介は一寸お休みさせて頂き、代わりに2、3回に亘り、我が日本工

学アカデミーも1990年に加入しましたCAETS（Council of Academies of Engineering and Technological Sciences）の御紹介をしたいと思います。

CAETSは日本工学アカデミーでは“世界工学アカデミー連合”と訳している場合が多いようですが、直訳すると“工学及び技術科学アカデミー評議会”となります。ただ、会員の皆様の多数はCAETSという



ことで理解されていると思いますので、日本工学アカデミーニュースでは翻訳せず、通称のCAETSを使うことにしたいと思います。

CAETSの設立と米国工学アカデミーなどのCAETSのメンバーアカデミーからの呼びかけが、日本工学アカデミー設立の一つのきっかけでもあったと理解しておりますので、CAETSの御紹介もその設立の経緯から始めたいと思います。

#### (第1回集会)

CAETS結成の胎動は1978年に遡ります。同年10月31日に米国工学アカデミー (NAE/US) がイニシアチブを取り、その主催で第1回工学アカデミー及び類似 (similar) 団体の国際集会 (Convocation) が開かれ、オーストラリア (ATS)、デンマーク (ATV)、スウェーデン (IVA)、メキシコ (NAE/Mexico)、イギリス (FEng.現RAEng.) 及びフィンランド (FACTE) が代表を派遣したほか、イスラエル及びインドの技術者も参加しました。各アカデミーの歴史、目的、活動等の紹介の加えて参加者は各国の工学アカデミーとその社会 (一般大衆、政府、産業、学界)、姉妹関係にある科学アカデミー及び他国の工学アカデミーとの関係とそれらを踏まえての各国のアカデミー間の連携について議論した結果、スウェーデンアカデミー (IVA) を議長とする企画委員会を結成し、第2回の集会を計画する事になりました。

#### (第2回集会)

第2回工学及び類似 (like) アカデミー集会は、非公式の組織として1980年4月8、9の両日オーストラリアのメルボルンでオーストラリアアカデミーの主催で開催されました。主な話題は、技術変化のマネジメントで、スウェーデン、アメリカ、イギリス、メキシコ及びオーストラリアの各アカデミーの代表が意見を述べ、またユーゴスラビア、インド及び日本からの参加者 (不破祐会員、同氏はNAE/USの外国人客員会員に1979年に選出されている) の発言もありました。不破会員は日本における工学アカデミー類似団体として日本学士院及び日本学術会議について、その設立の経緯、構成、活動等について概観すると共に、その問題点、特に各国の工学アカデミーに対応する組織として考えた時の問題点を指摘され、その解決のために日本でも工学アカデミー設立の動きが開始されている旨を発言されました。(同氏は、この集会の主要議題である技術変化のマネジメントについても日本の鉄鋼業を例にとって発言されました。) その結果、情報交換のための事務局が米国アカデミーに設けられました。

Member  
Council of Academies  
**CAETS**  
of Engineering and Technological Sciences

#### (第3回集会)

1981年9月21、22の両日、メキシコのオアハカで第3回工学アカデミー及び類似 (similar) 組織集会がメキシコアカデミーの主催で開催され、工学教育における国レベルの展開 (Development) についての発表がありました。第3回集会の結論として参加アカデミーは緩い国際連合体 (Federation) が有益であろうとのこととなり、オーストラリアが議長となり、スウェーデン、米国オーストラリアおよび副議長としてのメキシコを含む運営委員会が結成されました。

#### (第4回集会)

第4回工学アカデミー集会はスウェーデンアカデミーの主催で、1983年5月29日から6月1日迄スウェーデンのストックホルムで、それまでの集会とは若干異なった形で開催されました。幅広い話題—重要な技術の流れ—がテーマとして選ばれ、5つのアカデミーが5つのセッションを組織し、各セッションで3人か4人の講師により、特定のテーマについて報告しました。講師は必ずしもセッションを組織したアカデミーの国の人ばかりではありませんでした。

5つのセッションと担当のアカデミーは：

航空 (イギリス)

バイオテクノロジー (米国)

人工知能とコンピュータ科学 (メキシコ)

新素材 (オーストラリア)

ロボットと自動化生産 (スウェーデン)

でした。

第4回集会の後に行われた運営委員会で、国際的関心や参加者の増加から見て、“工学及び技術科学アカデミー集会”と名付けられる包括的な工学組織を作る事が有益であるとの結論で、2年毎の会員回り持ちの会長、副会長に代表されるものとするのが良からうとの事になりました。集会事務局が、活動の継続性の維持のために集中点として、米国アカデミー内に設立されました。集会組織と出席についてのガイドラインが採択され、イギリスアカデミーが運営委員会に招請されました。



(第5回集会)

1983年11月3日に米国のワシントンで開催された運営委員会の企画会議では、次回集会の場所とテーマに加えて集会の目的や性格、新会員の資格や加入承認の方法などについて長時間に亘って検討し、メキシコと米国が次回の運営委員会の討議資料となる文書を用意するよう要請されました。

第5回集会はイギリスのロンドンで英国のアカデミー(当時はFellowship)の主催で、前の第4回の集会のパターンを踏襲して開催されました。主題は技術の地球規模での相互作用(Global Interaction)で5つのセッションで

海底工学(イギリス)

地球規模の技術と食糧生産(オーストラリア)

貨物輸送(スウェーデン)

通信技術(メキシコ)

製造技術の進歩(米国)

について議論されました。括弧の中は各セッションを組織した担当のアカデミーです。

次いで行われた運営委員会で、メキシコとアメリカによって準備された一般規則(General Rules)が討議されました。原案は暫定的に承認されました

が、委員会は多数の変更を加え、これを入れた改訂版を作成するよう要請しました。会議の最後に、会長に米国が、副会長にオーストラリアが選出されました。

(正式なCAETSのスタート)

1985年10月4日、メンバーは米国のワシントンで初めてCAETSの管理理事会として会合し、第6回集会の計画をたてると共に暫定規則の改訂版を審議し、若干の追加修正の後、CAETSの一般規則が5つの創立会員、即ちオーストラリア(ATS)、英国(FEng. 現RAEng.)、メキシコ(NAE/Mexico)、米国(NAE/US)及びスウェーデン(IVA)の各工学アカデミーにより採択されました。

この様にCAETSは1978年の第1回の集会から始まる一連の活動を通じ、1985年になってようやく現在の組織が確立されてきましたので、その設立の時点を特定することは困難ですが、CAETS事務局では第1回集会の行われた1978年をCAETS創立の年としています。またCAETSは、現在の日本工学アカデミーと同様任意団体で法人化はされていません。(未完・次号に続く) (文責 桜井 宏)

---

## 日本工学アカデミー第3回国際シンポジウム開催迫る

---

1年以上に亘って国際委員会を中心に準備を進めて参りました日本工学アカデミー第3回国際シンポジウム「技術移転と技術拡散」は、予定通り来る3月14日(月)15日(火)の両日横浜ランドマークタワーにあるロイヤルパークホテル ニッコーで開催されます。猪瀬副会長を委員長とする組織委員の各位や、CAETS(世界工学アカデミー連合)会員の各国工学アカデミーの御協力のおかげで、当初予定された講師、パネリストのほとんどの方々に参加の御内諾を得る事ができました。現在考えうる最高の陣容と考えられます。

御案内は別便にて全会員をはじめ、関係各位にお

送り申し上げておりますが、会員各位多数の御参加をお待ち申し上げております。一般の方々からは変動費を随う登録料をお願い申し上げますが、会員各位の登録は無料に致しております。また会議の書類は原則として英文ですが、講演、パネル討論には日英同時通訳を用意致しております。

登録は当然の事ながら会員優先とさせて頂いておりますが、会場の収容能力に限りがあり、また会員外からの有力な参加者にも是非加わって頂きたいと存じますので、会員各位からのお申込みはお早めに頂ければ幸いです。



# The Engineering Academy of Japan

## News No.36, January 1994

志 岐 守 哉 会 員

三菱電機株式会社取締役会長

平成6年1月9日逝去 享年69歳

謹んでご冥福をお祈りいたします。

### 編 集 後 記

今年の年賀詞交歓会には、約170名の参加申し込みを頂きました。

朝方には雪が降り、開会の頃には冷たい雨が降りしきる気象条件の下で、約120名という多くの会員をお迎えして、本会に相応しい素晴らしい交歓会になりましたことに、厚くお礼申し上げます。

和気あいあいの中での交歓の有様を拝見しながら、平成6年戌年の幕開けをお祝いする気持と同時に会員各位の本会に寄せる熱意を強く感じました。

さて、本号では、時節に因んで会長・副会長からの年頭のご挨拶をはじめとして、旧ろうに開催されました第57回および第58回談話サロンのご報告ならびに第3回EAJ国際シンポジウム開催直前の御案内等をお届け致します。

ご一読頂きまして、お気付の点などございましたら、ご指摘ご助言を賜われれば幸甚でございます。

末筆になりましたが、去る1月9日逝去されました志岐守哉会員のご冥福をお祈り申し上げますとともに、会員各位のご健康と今後のご活躍を祈念申し上げます。

(編集子)